【2022年2月7日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター 50号

http://jsics.org/

日本国際文化学会事務局
龍谷大学国際学部松居研究室内
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
Tel:075－366－2223
Email: jsics@world.ryukoku.ac.jp

2022年度 第21回全国大会 開催のご案内（開催校：神戸大学）

第21回全国大会に向けて

第21回全国大会実行委員長　岡田 浩樹
（神戸大学大学院国際文化学研究科教授）

日本国際文化学会第21回全国大会を、神戸大学で開催させて頂くことになりました。2022年に入って早々、新型コロナ第6波が到来しておりますが、ワクチンの普及に加え飲み薬の開発など、前年までとは違った社会情勢を背景に、対面での開催を目指して準備を進めて参ります。

コロナ禍は、国境をこえた人の移動に強いブレーキをかける事態を招きましたが、遠からず国境は開かれ、物理的な人の移動も再び活性化されて行くでしょう。人の移動は文化の移動を伴います。移住・移民に伴う異文化の接触が生み出す事象の考究は、国際文化学にとって大変重要な研究課題であることは言を俟たないでしょうが、今回の全国大会ではまさにこの点に焦点を当て、そこで生じる課題に向き合いたいと思います。

また、異文化接触に伴う課題の探究という点では、今大会では視野を地球上の世界にとどまらず宇宙にまで広げ、宇宙空間に地上の生活世界を再現するのか、それとも新しい社会・文化を創造するのかという問いに挑んで行きたいと考えています。

「国際文化学の今日」として「移民と多文化共生」の課題を掘り下げ、併せて「国際文化学の未来」として「宇宙と文化」の射程を開く契機としたいと考えています。国際文化学のさらなる飛躍の場とするべく、大会実行委員一同、多くのご参加をお待ちしております。

全国大会開催要項

【開催日時】2022年7月9日(土)～10日(日)
【開催大学】神戸大学(鶴甲第 1 キャンパス)
〒657－8501　神戸市灘区鶴甲1丁目2－1
※新型コロナの感染状況によってはオンライン開催となる可能性もあります。
【参加費・申込】学会ホームページ等にて、今後ご案内いたします。
【大会日程】

1日目:7月9日(土)

9:00	受付
9:30 -11:00	自由論題I
11:00-12:30	自由論題II
12:30-14:00	昼・大学院生交流会
14:00-16:00	共通論題A
16:00-18:30	シンポジウム「移民と多文化共生」
18:45-20:30	情報交換会

2日目:7月10日(日)

9:00	受付
9:30-11:00	自由論題III
11:00-13:00	共通論題B／共通論題C
13:00-14:00	昼・総会
14:00-15:30	フォーラム
15:30-18:00	シンポジウム「宇宙と文化」

※自由論題の採択数等によりスケジュールが多少変更されることがあります。

第21回全国大会　大会テーマ

人の移動、文化の移動―世界から宇宙へ

21世紀も20年が過ぎ、世界中で移住・移民が常態化し、ホスト社会との共生が日常になっています。ボーダーレス化はこれまで以上に進行し、交通手段の発達に伴い、より遠距離の移動も常態化するでしょうし、さらに将来的には、移動は地球上の世界にとどまらず、宇宙へとその射程を広げていくでしょう。

既存の国民国家観に基づく社会制度は、現実への対応に支障を来す（あるいはすでに来してる）可能性があります。たとえば多様な文化・出自を有する子どもが集まる学校という場において、それぞれの文化・出自の独自性を尊重し合いながらも、その独自性を超越した真理を探究することが求められています。こうした課題へのアプローチは、まさに国際文化学に期待される使命と言えるでしょう。

第21回大会では、人の移動にともなう文化の移動がもたらす様々な事象について、「移民と多文化共生」と「宇宙と文化」という2つのシンポジウムを含め、多角的に掘り下げていきたいと考えています。

共通論題の発表タイトル

① アドボカシー・デモクラシー・多文化共生　国際文化学からみた高橋良輔の学問的意義
　代表者：芝崎厚士（駒沢大学）

② 文化と大衆――文化の「大衆性」と「多様性」
　代表者：鈴村裕輔（名城大学）

③ 地域社会の国際文化：神奈川の地域史にみる文化の交流と創成
　代表者：加藤恵美（帝京大学）

※順不同。発表者は代表者のみ明記。

【大会会場への交通アクセス】

① JR 新大阪駅から（約50分）
［JR新大阪駅］→（JR神戸線）→［JR六甲道駅］→（神戸市バス 16系統/106系統）
→［神大国際文化学研究科前］

② JR新神戸駅から（約35分）
［JR新神戸駅］→（神戸市営地下鉄）→［三宮/神戸三宮駅］→（阪急神戸線）→［六甲駅］→
（神戸市バス 16系統/106系統）→［神大国際文化学研究科前］

③ 大阪伊丹空港から（約65分）
［大阪伊丹空港］→（大阪モノレール）→［蛍池駅］→（阪急宝塚線）→［十三駅］→（阪急神戸線）→［六甲駅］→
（神戸市バス 16系統/106系統）→［神大国際文化学研究科前］

【宿泊先】

宿泊に関しては各自で手配をお願いいたします。

大学の最寄り駅である阪急六甲、JR六甲道付近には宿泊施設がありませんので、神戸市内でしたら三宮駅近辺がもっとも便利かと思います。あるいは大阪市内からでも無理なくアクセスできます。

【大会参加費・大会申し込み】

大会参加費と振込先、参加申込み方法については、学会ホームページ等にて、今後ご案内いたします。

【自由論題発表申し込み】

2022年3月20日が申し込み締め切りとなっております。詳細は学会ホームページをご覧ください。

大会事務局
日本国際文化学会第21回全国大会実行委員会（実行委員長　岡田浩樹）
連絡先メールアドレス：JSICS2022@gmail.com
連絡先住所：〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1
神戸大学国際文化学研究推進センター　気付
（注：2022年4月以降は「国際文化学研究推進インスティテュート」に改組予定）

ジャズとは何か？－会長退任のご挨拶に代えて

日本国際文化学会会長　馬場　孝

「ジャズとは何か、なんて聞いているうちは、ジャズは絶対にわからない」。1970年代に、とある「教科書」の最初のページで出会った言葉です。ジャズの定義を聞いてくる相手への、ルイ・アームストロングの返答だと伝えられています（*The Language of Man, Book6*,　McDougal, Little, 1971）。

「国際文化学って何ですか？」　会長在任の3年間、さまざまな折に聞かれるたびに、上の言葉が思い浮かぶようになりました。私個人の力不足に他なりませんが、案外、伝わらないのです。なかには学会HPにくまなく目を通し、然るべき資料もじっくりお読みいただいているにもかかわらず、「よくわからない」という方もおいででした。

私自身はジャズには全く興味はありません。ほとんど聴いていませんので、「嫌いだ」と言い切ることすらできません。しかし、ジャズとは何かとは、確かに「ことばで」説明するのは難しいのだろうと想像はつきます。「わかる」には、楽器を手にしないまでも、やはりレコードで、ジャズ喫茶で、できればライブに足を運んで「聴く」ことが必要なのでしょう。

ハイコンテクスト/ローコンテクスト

国際文化学はこの「ライブ感」が強い学問なのでしょうか。エドワード・ホールの「ハイコンテクスト」「ローコンテクスト」の区別も想起されます。演奏者の表情、音色、共鳴、聴衆の熱気といった「文脈」「背景」への依存が高い「ハイコンテクスト」な学問なのかもしれない、というと語弊があるでしょうか。

学会の内部にいると、「文脈」を共有する度合いは確かに高まります。たとえば、昨年の全国大会、画面越しにも伝わる基調講演とパネルディスカッションの「熱気」もコンテクストのひとつとして思い浮かびます。あるいは「躍動感」「動き」でしょうか。シンポジウムでも何度か引用された、「名詞から動詞へ」という白石さやさんの言葉（ニューズレター29号）も脳裏に浮かびます。国際文化学は「何であるか」よりも「何をするか」が当初より息づいている学問なのかもしれません。

冒頭のルイ・アームストロングの言を伝えるのはS・I・ハヤカワで、次のように文章は続きます。「ことばの真の意味は・・・・・・ことばそのものについて述べていることからは見いだせない」（*Symbol,　Status, and Personality*, 1950）。「教科書」には、隣ページ全面に、釘やカミソリやナイフやらがはみ出た、げに恐ろしげな「辞書」の写真が載せられています。ことばの真の意味は辞書のなかにはない、という一般意味論からのメッセージなのでしょう。

物語

しかし、今こそ私たちは、「コンテクスト」なしにも伝わる「ことば」を持たなければなりません。「ハイコンテクスト」な学会内部だけでなく、「ローコンテクスト」の外部に向けて国際文化学の「事　典」を編纂する。菅野敦志さんを中心とする20周年記念事業推進委員会の皆さんは、「言うは易く」のこの難事業に乗り出されました。ことばの真の意味を、ことばについて述べることで伝えようというチャレンジです。そして「動く学問」の「動き」や「ライブ感」の伝え方を、「物語」という編集の方向性に見いだしているように見受けられます。

対面授業の再開（2021年）：少し怖いが、やはりうれしい

目下、お気持ちと関心のある全会員に向けて、この事業への参画が呼びかけられる段階にきていると推察いたします。実は学会のなかにも「ライブ感」の共有は温度差が大きいに違いありません。目指す「事典」には、「その場にいなければわからない」から「その場にいなくてもわかる」という「再現性」も求められております。「外部」にいる人が思わず手に取り、引き込まれるような「事典」を創るためには、これまで必ずしも「文脈」を高度に共有されてこなかった方々のお力こそが求められているのではないでしょうか。それぞれの「楽器」を手にした多くの方々のご参集をお願いいたします。

謝辞

会長在任の3年間は、予期せぬ事態の連続でした。同時に、これほど「人に助けられた、救われた」という経験もこれまでの人生でありませんでした。両副会長と三人で並ぶと「まるでご老公に助さん、格さん」だと言われた就任時が懐かしく思い出されます。ご両名はじめ、助けていただいた方々のお名前をひとりひとり挙げて謝辞を書き始めたところ、頁数がまるで足りません。拙文をもってご挨拶に代えさせていただきます。3年間、本当にありがとうございました。

ICCO短期集中セミナーにて（2019年）

JSICS20周年記念事業推進委員会の活動 ①

JSICS20周年記念事業推進委員会事務局長　加藤 恵美
（帝京大学）

会員の皆さまには、学会20周年記念事業に関する昨年の全国大会フォーラムへの積極的なご参加をいただき、ありがとうございました。その後、2021年10月9日に開催された第87回学会常任理事会において、20周年記念事業推進委員会の発足が承認されました。この委員会は、国際文化学会会員の幅広い参加による『国際文化学事典』(仮)の制作を通じて、「国際文化学のありかた」を示すことを目指します。委員は下記の8名です。このうち、菅野敦志会員が委員長、吉岡剛彦会員が副委員長、加藤が事務局長を務めることになりました。

菅野敦志(委員長)

吉岡剛彦(副委員長)

	分科会テーマ	委員／分科会リーダー
①	記憶の共同体	大和裕美子(九州共立大学)・ 斉藤 理(山口県立大学)
②	移民と国際文化	加藤恵美(帝京大学)
③	大衆文化のボーダーレス化	鈴村裕輔(名城大学)
④	ジェンダーと文化	吉岡剛彦(佐賀大学)
⑤	情報・ことばと文化	高橋 梓(近畿大学)
⑥	中心・周辺と文化政策	菅野敦志(共立女子大学)
⑦	国家と国際文化交流	齋川貴嗣(高崎経済大学)
⑧	環境と災害	鴫原敦子(東北大学)

この間委員会は、「とにかく活動を始める」ことを最優先課題としてきました。各委員は、これまでの3ヶ月の間に、それぞれに2～3名の会員に声をかけ、コアメンバーを固めながら、各テーマにおける「国際文化学」を探り始めたところです。委員会においては、そうして各分科会で明らかになりつつある課題を共有し、『国際文化学事典』の土台となるような基本的なフレームワークを検討し始めています。委員会はこれまで月1回のペースで、計3回開催されました。委員会には、馬場孝会長、都丸潤子次期会長、松居竜五学会事務局長も参加されました。

■ 今後の見通し、予定

委員会は、3年後くらいの『事典』出版を目指して活動しています。しかし、試行錯誤の段階にある今は、目前の小さな目標を適宜定めて、事業を着実に前に進めていくことの方を重視しています。現在は、より広い学会会員に本事業への参加を募るべく、次のことを目標として活動しています。それは、次回の神戸の全国大会のフォーラムで、広く会員に(1)『国際文化学事典』のもう少しはっきりした輪郭と、(2)テーマごとに数項目分の文案を示すことです。(1)については、フォーラムにおいて(願うところでは)対面のライブ形式で示し、(2)については、フォーラムまでに各分科会が準備を整えて、動画や資料の配信などのオンライン・オンデマンド形式で示す予定です。

■『事典』の形式

現時点での構想として、『事典』の構成は、大項目、中項目、小項目の階層構造をもちます。つまり、「読み物」として成立する『事典』を目指そうとしています。

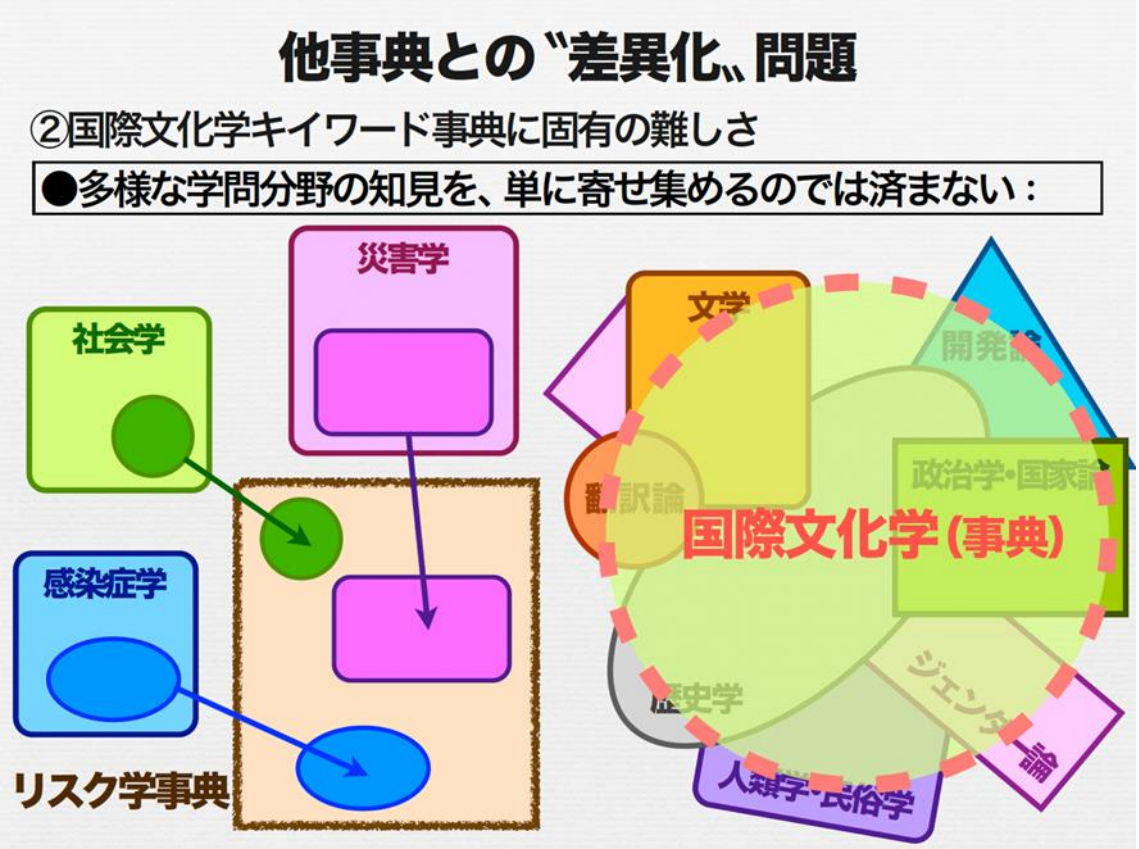
上記の8つの分科会テーマが、大項目に相当します。この大項目レベルでは、各テーマについての「総論」が書かれます。これに対して、中項目と小項目レベルでは、テーマ内の「各論」が書かれます。この構造を論文として見立てていうと、大項目は「章」であり、そこでは「はじめに」とか「おわりに」に相当するものが書かれ、中項目は「節」、小項目は「見出し」であり、その単位に相当する大きさの議論が書かれようとしています。

現段階では、各分科会が15程度の小項目(1ページないし2ページ)からなる立体的な議論を示すことを目指しています。1ページ＝1,200字程度と想定すると(このニューズレターの1ページに相当します)、各章45ページで総ページ数360ページほどのボリュームの『事典』が完成することになります。隣接分野の既存の事典、例えば『文化人類学事典』(丸善出版、2009年)は総ページ数がおよそ800ページとなっています。ボリュームという観点からみても、一般的な『事典』とは少し質の異なる、教科書のようなものによりに近い「読み物」になりそうです。

■ 課題

会員の皆さまは、「国際文化学とは何か」とそれぞれに問いながら、学会の活動に参加されてきたのではないでしょうか。『国際文化学事典』の制作は、この問いに対する一定の答えを導き出そうとする活動です。

『リスク学事典』(丸善出版、2019年)という事典があります。この事典は、日本リスク研究学会という学際的・領域横断的な学会が、学会30周年の節目に出版した事典です。委員会では、副委員長の吉岡会員が、『国際文化学事典』の課題は「他の関連分野、隣接分野との差異化」であるとしながら、この『リスク学事典』を取り上げて、両者の違いを次のような図で示しました。



既に「リスク」は、比較的はっきりした事象・概念となっています。そのため、『リスク学事典』においては、様々な学問分野で研究されてきた「リスク」を取り上げて、それを集合させることで、他事典との差異化が図られています。これに対して、『国際文化学事典』は、そのような差異化が難しそうであることを上図は示しています。学際的・領域横断的にこれまで研究されてきた「国際文化」とはいったい何か。現段階では、それを明確化することが国際文化学の課題であり、「国際文化学とは何か」の探究になるように思われます。

上述の8つの分科会のテーマは、「国際文化学」的です。会員の皆さまも、これらのテーマに対する違和感を、それほどお持ちにならないのではないでしょうか。その一方で、これらの8つのテーマは、これまでの学会大会報告や『インターカルチュラル』掲載論文などに表れた学会会員の関心に基づいて直感的に立てた面があることを否めません。まずはなぜこの8つのテーマが「国際文化学」的に重要であるのかについて、ことばにする必要があります。神戸大会までに、委員会なりの見解をまとめられたらよいと考えています。

最後に、会員の皆さまのご協力、積極的なご参加を心からお願い申し上げます。

参加希望、ご意見などは、
JSICS20周年記念事業推進委員会事務局(jsics20jiten@gmail.com)までお寄せください。

私の研究履歴―会員紹介

本号ではお二人にご寄稿いただきました。
お一人目は、跡見学園女子大学の小川忠会員です。
前号の湯淺会員からの東南アジア繋がりです…。
（事務局）

小川　忠
（跡見学園女子大学 教授）

大学教員となったのは2017年で、研究者履歴5年にも満たず、まだまだ未熟者です。その前は、国際交流基金にて文化交流の実務の世界で35年間生きてきました。同基金ではインドネシアに2回通算10年間、インドに3年間駐在し、日本語教育・日本研究・文化芸術交流・市民交流などの現場に身を置きました。

そうした経歴から、私の研究関心は1)国際文化交流政策と2)地域研究（インドネシア・インド）、の二つの領域にまたがります。

まず1)に関し、早稲田大学で後藤乾一先生指導のもと博士論文「米国の対沖縄パブリック・ディプロマシー（1940-1968）の研究　―琉球大学の創設と沖縄知識人の反応―」を完成させ、2012年に博士号（学術）をいただきました。この一部は、『戦後米国の沖縄文化戦略』（岩波書店、2012）と題して公刊されました。これからも世界の国際文化交流政策を研究し、実践に生かしていきたいと念願しています。

次に2)に関して一貫して追いかけている対象が、世界各地で進行中の「宗教復興」です。

初めて赴任した80年代末インドネシアでは、スハルト大統領の強権体制下、近代化、社会開発が強力に推し進められていました。その開発政策によって拡大した都市部中間層のあいだでイスラーム意識高揚現象が起きていることを知りました。近代的自我に目覚めた、高学歴の若者が「イスラーム覚醒」するという興味深い状況を報告したのが、『インドネシア　多民族国家の模索』（岩波新書、1993）です。

そしてほぼ20年ぶりに2011年にインドネシアに再赴任して、「イスラーム覚醒」の加速を痛感しました。これについては、『インドネシア　イスラーム大国の変貌』（新潮選書、2016）で、政治・経済・教育・文化芸術・日本との関わり等多角的に論じました。

インドネシア女子イスラーム寄宿舎にて

多宗教国家インドでの駐在経験からも大きな刺激を受けました。私のインド赴任直前の1998年5月11日、発足したばかりのヒンドゥー・ナショナリズム政党・インド人民党（BJP）政権が核実験を強行し、世界に衝撃を与えました。建国以来世俗主義的な国是を採用してきたインドで、BJPはヒンドゥー教徒優先政策を採用し、国内のヒンドゥー教徒とイスラーム教徒のあいだでの暴力事件が頻発しました。当時日本ではヒンドゥー・ナショナリズムは、まだなじみの薄い言葉でした。駐在生活の傍ら『ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭』（NTT出版、2000、アジア・太平洋賞特別賞）を執筆し、「ヒンドゥー・ナショナリスト」とは誰なのか、その思想的起源を探り、「宗教紛争」と呼ばれる現象は本当に宗教の対立なのか、を世に問いました。

さらにヒンドゥー・ナショナリスト言説をたどってみると、イスラーム主義や戦前日本の超国家主義思想との類似点があることに驚きました。『原理主義とは何か』（講談社現代新書、2003）、『テロと救済の原理主義』（新潮選書、2007）では、「原理主義」という尺度を通じて現代世界の宗教復興現象の比較検証を試みました。

最新作『自分探しするアジアの国々』（明石書店、2021）は、CMやヒップホップなどのネット動画からアジア各国のアイデンティティーのあり様を考える、というアプローチを採用しました。多様でダイナミックなアジアの魅力を学生たちに伝える教育実践から生まれた一冊です。

次回の「私の研究履歴」、「若手研究者紹介」に掲載を希望される方を募集しております。
自薦他薦を問いません。「この方の紹介を読んでみたい！」などのリクエストもお待ちしております。
応募先/問い合わせ先：学会事務局
jsics@world.ryukoku.ac.jp

私の研究履歴―会員紹介

今年度の学会大会のシンポジウムでパネリストとして登壇してくださった沖縄国際大学の岡野薫会員に、お二人目としてご寄稿いただきました。

岡野　薫
（沖縄国際大学　准教授）

銅鑼をたたき、浴衣のようなものをまとって茶会を催していました。「東アジア」の茶会だといいます。日本人だと私が名乗ると、「ここはドイツだから」と参加を断られてしまいました。いったいドイツの人々は「東アジア」にどのようなイメージを抱いているのでしょう。ふりかえると、私の関心は、こういった体験に萌芽があるようです。最初に好奇心を満たしてくれたのは、アードルフ・ライヒヴァインの『中国とヨーロッパ』(1923)です。18世紀ヨーロッパにおける中国熱の流行を主題とした本です。束の間の流行とみなされてきた中国熱を、彼は真摯な文化接触として素描します。ひとつの世紀の歴史、美術、思想そして文学の中国熱を一望しようとする企てに、心ひかれました。

比較文化を学びたいと思い、仙台にある大学院の門をたたきました。ここで本学会会員の高橋梓さん、朝立康太郎さんと共に学ぶことになります。仙台を離れて10年ほどですが、本学会のシンポジウムでふたたびお二人と発表をご一緒できました。かかる機会と場所とを与えてくださった日本国際文化学会と会員の皆様に感謝を申し上げたいと思います。

ベルンハルト・ローデ中国皇帝の籍田（ベルリン）

仙台での学びは、いつも順風満帆だったわけではありません。東アジアとヨーロッパとの関係は多面的で複雑、資料も膨大、あたかも航海図を持たぬまま大海を彷徨うような年月も過ごしました。それでも研究をまとめることができました。多くの出逢いがあったからです。

研究に悩んでいた時、京都で開催された研究会に出席しました。参加者は、お名前のみ存じ上げる先生がたばかり。憧れるだけの方々が、いま眼前で発表し、議論しています。何度か足を運ぶうちに研究会の正式な参加者として迎えていただきました。その研究会のことを、主催者は「研究者の作業場」と表現しておられました。研究の舞台裏を拝見しながら、私の研究も像を結んできました。18世紀ドイツの日本観を主題にしたい、医師エンゲルベルト・ケンペルを中心にしよう、そう思いました。

アマーリエンブルクの中国趣味（ミュンヒェン）

仙台京都間の移動は楽しい読書の時間でもあります。往復の車内で島崎藤村の小説を読みました。一人の主人公の一生をたどり、その運命に幕末から明治という時代を投影させていました。ドイツにおける日本観の変容も、同じように描出できないだろうか。博士論文の構想はそこから生まれました。18世紀ドイツの日本観は、一見、さまざまです。しかし、さまざまなものを、ひとつの変化としてとらえてみたかったのです。私にとって、主人公はケンペルの日本論です。彼の日本論の18世紀における読まれ方、つまり、本の運命を通じてドイツの日本観を浮き彫りにする、それが私の研究です。

ドイツ各地の図書館でも学びました。日本に関する記事は、思ったよりも遥かにおおくありました。結局、持ち出せる限りの資料を閲覧室に並べ、懸命にページをめくることになりました。胸壁のように積み上げられた本の向こう側から、ドイツ人の先生が苦笑しながら声をかけてくださいます。「コーヒーにしましょう、焦らなくても読む本には一生困りませんから」。

レムゴ市ケンペル記念碑

迷走の果てに学位論文『18世紀ドイツにおける日本観』が完成しました。いま、沖縄で、自分の研究履歴を、その遅々とした歩みとともに思い返します。そこには、辛抱強く付き合って下さった先生がたがおり、倦むことなく議論に付き合ってくれた友人がいます。私の研究履歴はどうやら学恩と友情からできているようです。感謝の念を本学会での活動に生かしてゆけたらと考えます。

事務局からのお知らせ

2022年度のICCOに向けて

昨年度から今年度にかけて、2年続けてコロナ禍のために短期集中セミナーを中止したICCO制度ですが、2022年度に向けての再起動を目指しています。

まず、2021年度末には、短期集中セミナーの中止にともなって、学習活動報告による資格取得を奨励しています。締め切りは3月31日ですので、該当する学生がおられる場合には、申請を促していただければと思います。

また2022年度に関しては、短期集中セミナーのオンラインによる開催が決定されています。具体的な開催方法は、3月にはウェブサイトで公開する予定です。ICCOの新たな出発に向けて、参加校および会員のみなさまのご協力をお願い申し上げます。（ICCO事務局　松居竜五）

第21回全国大会自由論題発表者募集（締切：3月20日）

第21回全国大会の自由論題の発表者を募集しています。

●自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。

●応募は、氏名・現職・連絡先・自由論題発表題目・キーワード（3～5語）を冒頭に記し、発表要旨をつけて、全国大会実行委員会事務局までメールにて提出をお願いします。
※詳細は学会ウェブサイトの全国大会発表要項（PDF）をご確認ください。

●応募先/問い合わせ先：第21回全国大会実行委員会　JSICS2022@gmail.com

第12回平野健一郎賞募集（締切：4月30日）

第12回平野健一郎賞の募集を開始します。多数のご応募をお待ちしております。
応募に関しては学会ウェブサイトの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。

●応募対象：本学会に所属する若手研究者

●授与対象：直近の学会誌『インターカルチュラル』に掲載された論文、又は会員の自薦、他薦により推薦のあった論文で大学紀要などに掲載された論文等

●応募書類：応募書類は審査後に返却いたします。

●応募結果の発表：第21回全国大会総会において発表し、授与式を行います。

●応募先/問い合わせ先：日本国際文化学会事務局　jsics@world.ryukoku.ac.jp

会費納入のお願い

・2021年度会費を未納の方はお振込みをお願いします。
正会員　一般会員：10,000円、大学院生：5,000円
学部生：2,000円（学会誌は別途購入）

◆ゆうちょ銀行へ振替用紙を使用してお振込みの場合◆
記号番号：00920-8-325835

◆ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合◆
ゆうちょ銀行 店番〇九九・店番099・当座預金・
口座番号0325835
名義：日本国際文化学会

・年会費未納分は速やかにお振込みお願いいたします。
・過去の会費未納分は相当額の学会誌購入で充当できます。
・会費納入に困難を覚える方に対する減免制度があります。
※詳細は事務局までお問い合わせください。

◆学会誌の販売について◆

学会誌『インターカルチュラル』の追加購入や、バックナンバーのお求めは**日本国際文化学会事務局**まで、メールまたは郵便でご連絡ください。

※セット販売は郵送料無料です。
※個別に購入の場合には、送料をご負担くださいますようお願い申し上げます。

編集後記

2001年12月にニューズレター第1号が発行されました。20年の時を経て、今号で50号を迎えることができましたことをうれしく思います。次号は、全国大会のご案内と合わせて紙面をリニューアルしてニューズレター50号記念企画を予定しております。本号でも紹介したとおり20周年記念事業が始動しております。また、次年度は5年に1度の会員名簿作成を行います。今後も日本国際文化学会が着実に前進していくためにも、会員の皆様のご協力が欠かせません。どうぞよろしくお願い致します。（事務局 池田）

ニューズレター第1号